プレゼミの学生と三鷹の森ジブリ美術館への訪問
宮崎監督の想像世界

国際日本学部　国際文化交流学科　ブライアン ルパート
国際日本学部　国際文化交流学科2年　海野 航平・大嶺 日向子
国際日本学部　歴史民俗学科2年　外處 裕弥

7月15日には私は「フィルムとビジュアルの日本宗教文化」のプレゼミ生七人と一緒に三鷹の森ジブリ美術館に行きました。同じ週の火曜日のクラスでは、杉田俊介著『宮崎駿論』の抜粋「『となりのトトロ』の自然」、「アニミズムとアニメーション」、および「日本的自然観」を読みましたので校外学習として三鷹へ行きました。残念ながら、一人の学生は高熱になったため行けませんでしたが、七人は参加しました。2年生の海野航平、大嶺日向子、後藤蓮、佐藤光、境基晴、石井斐々希、外處裕弥は皆さん興味深く森に入り、ジブリ美術館の門に近づきました。妻（小野坂順子）と息子（祥）も共にしたので、早めに集まった四人のプレゼミ生との写真を撮ってもらいました。

学生一人は遅くなったので、私は門の前で待っていました。朝11時の湿度はもう高かったが、幸い、美術館の囲む頭上の木々のお陰で日差しがあまり当たりませんでした。ただ、宮崎のワールドへ入ることが待ちきれなかったのでした。六人の学生は先に入り、もうジブリの宇宙を訪問し始めました。その中には映画準備のコンテなど、宮崎が使っていた道具や家具を再現していた展示室もありました。さらには宮崎が若い時代に監督していたテレビ番組などの展示が並べられ、『となりのトトロ』の猫バスのミニ再現も見られました。学生三人の書いてくれた感想は以下の通りです。

仕事場の再現のコーナーで展示されていたさまざまな資料から、宮崎駿がどのようなものにこだわって映画制作をしていたのかを感じることが出来て、興味深かった。また、駅から美術館までの道が自然に溢れていたため、美術館に着く前からジブリの世界観に入り込んでいくようで、子供のころに感じていた自然とのつながりを思い出すことが出来た。

（海野 航平）

ジブリは、宮崎駿の想像力がすごいのだと思っていたが、「映画の生まれる場所（ところ）」という展示室にはたくさんの小説（時には英語で書かれた本）や図鑑があり、インスピレーションを受ける為にいろんな作品に触れていたのだと分かった。期間限定の展示室では、『未来少年コナン』の展示があった。私はその作品を観たことがなかったけど、ジムシーというキャラクターに既視感があり、沖縄の妖怪「キジムナー」がモチーフになっているのではないかと思った。ジブリは、日本の宗教の影響を受けていると言われるが、このようにある地方特有の妖怪まで取り入れているのが面白いと思ったし、色んなことにアンテナを張ってアイデアとして取り入れているのだとわかった。私は、まだまだ日本の宗教について勉強し始めたばかりだし、ジブリも全作品を見ているというわけではないのだが、ジブリ美術館に行ったことで、ジブリに反映された宮崎駿の宗教観やその影響となった事に興味が湧いた。後期のプレゼミでは、自分の興味を明確にして更に深く学んでいけたらいいと思う。

（大嶺 日向子）

とても楽しかった一日だった。宮崎駿の部屋を模した、展示は大変興味深かった。あの工房でジブリ作品ができたと思うと、よりジブリ作品が楽しめるというもの。また一階にあった、映画の歴史展のところもよかった。超高速回転させて、動いているように、見せていたのは面白かった。

（外處 祐弥）

学生はつまりそれぞれ異なる感想や解釈を持っており、ジブリアニメに対する興奮と学びの満足感が感じられます。後期の学びに対する好奇心や向上心も表れており、今後の宮崎監督の宇宙と精神世界についての研究が楽しみです。

筆者とプレゼミ学生外處、石井、境、海野―ジブリ美術館門の前にて